
姉が美人で大変だ

蒼都 響助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉が美人で大変だ

【Nコード】

N1841X

【作者名】

蒼都 響助

【あらすじ】

大学生の姉が俺と妹の暮らす我が家に久しぶりに帰ってきた。

美人な姉とその他もろもろでやってく
夏休み

エブリスタでやっています

略称は『あねがび』で

今日姉貴が東京から帰ってきた。

それは大変な毎日の始まり始まり

「お兄ーちゃん！」

妹の柚葉がバタバタと階段を駆け上がる音が聞こえてきた。ダンツと扉が勢いよく開く。

「おい柚葉。ノックしろって言って・・・」

「お兄ちゃん。くそお姉ちゃんが帰ってくる！」

「何っ！？なんて毒舌なんだ。久しぶりに聞いたな」

「驚くところコ！？あの糞ねえが帰ってくるんだよ！！」

「糞ねえって・・・せめてくそ姉にしとけ。というか姉貴ってそんなくそか？」

姉貴は大学生で大学入学から東京に行ってしまった。

確かに俺達をおいて行っちゃったことは許せないかもしれないが。

「うん。許せないぐらい美人」

「ただの嫉妬か」

「ち、ちがうし」

「で、いつ帰ってくるんだ？」

「今・・・」

今で、いつ連絡はいったんだよ・・・

「ただいまーーーーー！」

下の階から妙になつい声が響いてくる。階段を下りると、これまたなつい顔が。

「おかえり、姉貴」

「やつほー弟。久しぶりっ」

うん。マブい。

「鞆でかいな。なに入ってるんだ？」

「色々だね。それより妹はー？」

柚葉の姿が見当たらないようだ。まあそれもそのはず、俺の後ろに隠れているからな。

まあ何というか、柚葉は俺にはなつくんだけど、姉貴とは相性が悪いみたいなんだよな。

「ほらちゃんと挨拶しろよ」

「おかえりなさいお姉ちゃん」

「ただいま、いもうと」ニコッ

「よし、じゃあ今から夕食のためになんか買ってくるわ。姉貴と柚葉はメタスラでもやっといてくれ」

「わかった。あたしの腕にかかれば会心フィーバーで、殺りまくりの経験値がっぽりだー」

「そつちじゃねえよ。それ二人で出来んだろ」

「やだ、お兄ちゃん。私もいくー」

「ということで、あたしはメタルハンターになりきってますんで、いつてらしい」

メタルハンターねえ。なんか違う気がするが、

「じゃ柚葉いくぞ」

「ビールもお願いねー」

「・・・」

そして俺と柚葉はスーパーに向かうのだった。

「なあ、柚葉」

「なに？お兄ちゃん」

「スーパー行って一人で買い物出来るよな」

「えっ…なんで」

「ちょっと行きたい所があるんだ」

「やだ、お兄ちゃん。立ち読みなんてみっともない」

「ちげーよ。久しぶりに姉貴が帰ってきたからさ、ケーキでも買おうかって思って………ってなんで泣きそうになってるんだ」

「うう、だってお兄ちゃん私太るかもしれないよ。一昨日にも誕生日ケーキ食べたばかりだし。私が太っても愛し続けてくれる？」
ウルウル

「うん、そうだな。姉貴は俺の誕生日覚えてくれてないのか。それは困ったな」

「スルーしないでよ」グスン

「ごめんごめん。でもそんなの分かりきったことだろ」

「お兄ちゃん」

「太ったら許さないってことで。それじゃスーパー頼んだぞ」スタスタ

「がびーん」

帰宅して挨拶。これ礼儀。

「ただいまー」

「おかえりー弟」

リビングの方から返ってくる挨拶。迎えてくれたら嬉しかったが、盛大なゲーム音から考えると来てくれんのだろう。テレレテツテツテッーあ、レベルアップした。

「た、ただいま」

「おかえりーいもうと」

よく聞こえたなあと思うほど小さい声だった。

靴はキッチンとそろえる。これ礼儀。

「ケーキ買ってきたぞー・・・てうわっなんだその格好」

その輝くシルバー、振り上げられた剣、張りつめた弓。

「メタルハンター晴美、10人斬り突破したよー」ニコニコ

まんまメタルハンターだったわけだ。

そんな着ぐるみなんか入れて。だから鞆でかい訳だ。

「あと晴美^{はるみ}は姉貴の名前だ。」

10つて意外に普通だな。まあスライムすらスラッ^{スラッ}と擬人化する姉貴センスということだ。

「ん？ケーキい？」

「そうそう。姉貴が久しぶりに帰ってきたからな」

「じゃあ、今すぐ食べよ！」

「はあ？こつ^{こつ}いうのは普通食後だろ」

「あたしも買ってきたんだ。一昨日は弟の誕生日だったでしょ」

な、なんと姉貴が俺の誕生日覚えてくれていただと。買った宝くじの当選結果すら見たこと無い姉貴が？

「ヤッホーイ。喰うぞケーキ、姉貴のケーキ」

「そつか。喜んでもらえてよかった。それでも伊達に姉をやってる訳じゃないんだよ」

「・・・・・・・・・・」

「どーした柚葉。もつと喜べ。一週間のうちにケーキ三つなんてもう金輪際ないかもだぞ」

「どうしたらいいの神様、仏様、稲尾様、ゼタ様ー」ウワーン

「は・・・・・・・・？」

「お兄ーちゃん。ケーキ、たべたいよお」グスン

「わかったよ。太ってもお前はお前だ・・・・・・・・」

「お兄ちゃん」ウルウル

「・・・・・・・・やっぱお前の分もくってやるよ」

「がびーん」

まあ、食後。ちなみに料理俺担当。

「柚葉。ちゃんと食器もってけよ」

もちろん、これ礼儀。

「いいじゃん。私のケーキも食べちゃうんでしょ。ついでに頼むよ。うん、」

「お願いしますよーだ」

柚葉ちゃんは拗ねてるんでほっときましょう。ほっといたら、風呂は入りに行った。

これで姉貴とゆっくり話せるな。

冷蔵庫から、姉貴の買ってきたなんか高そうなおれの誕生日ケーキを取り出し切り分け、リラックス中の姉貴に渡す。

「ほいよ」

「わーありがと」

「いやいや。こっちが、ありがとさんだよ」

「本当にありがと」

「え・・・」

それは、真剣な姉貴の目だった。

「あたしがさ、大学生なってからずっと、弟がいもとの面倒みてくれてたんだよね」

「まあ、面倒つっても食事・洗濯・掃除ぐらいだし」

「あたしがやるべき家事を全部押しつけちゃって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからさ、夏休み中だけでも家事休みなよ。あたしが全部やるから」

「そんなこと、気にすんなよ。家事も楽しいんだぜ。料理とか、柚葉が美味しい言ってくれるだけで嬉しいし、洗濯してるとなんか心が洗われると言うか顕れたまえて感じだし。だから姉貴が気にすることじゃないんだ」

「おとうと・・・・・・・・ま、泣かないけどね」

「まあ心配すんなってことだ。姉貴がいなくても俺達は生きていくる」

「それは泣くぞ、おうい」

「姉貴がいなくてもいいってことじゃない。それは姉貴がいたほうが楽しいってことだから」

「うん」

姉貴がケーキの上のった苺をすくう。

「はい、あーん」

そしてそれを俺の口元まで運ぶ。

「どっつ?」

「うまいよ」

「よかった。コレ結構いいトコだから高かったんだよ」

姉貴の笑顔はいつみても安心する。

ここで姉貴紹介

身長：163cm

体重：ヒミツらしい

血液型：B型

FAVORITE

・ビール

・弟

・いもうと

DISLIKE

・読書

・犬

・苺

さっきの「あーん」

姉貴は母嫌いだっただけ。だと思っ

風呂場では必ず何かが起こる

目が覚めたのは、12時をすぎた頃だった。

やばい。夏休みとはいえ、朝の貴重な時間を失ってしまった。

……いや。寝ぼけてた。

今日は6時に寝たんだった。

もう少し寝るか。

(
—
) z z z

「おきろー弟」

「うう・・・なんだよ姉貴い」

「お腹へっちゃった。昼ご飯つくってよ。ねーえ」

「わーったから揺らすなって」

眠たい目をこすってキッチンに向かう。

「なにつくるの？なにつくるの！」

「なんでそんな元気なんだよ。姉貴の酒につき合わされてこっちは眠くて仕方ないのに」ブツブツ

「ああ、このテンション？寝てないだけだから」

「は？」

「人をなぎ倒しまくるのが楽しかったんだよ」ニッコ

「は？みんな寝てる間に何してるんだよ」

「バサラだから仕方がない」

「そりゃ仕方がないな」

「バサラだし」

「バサラだからな」

「それで何つくるの？」

「目玉焼き」

「えー昼だよー」

「いいじゃん。うまいのつくってやるからさ。そついや、朝飯どーした？」

「えと、食べてないよ。うんすつごいお腹すいてるし。あー我慢できな。目玉焼きならすぐだよね」

「まあ、十分程度かな」

「えーそんなに？」

「シャワーでもあびていいよ」

「はい。わかりました」

よし。まだちよいと眠いが、朝一番の本気。とくとごらんあれ。

「キヤ————！！！！！！！！！！」

その姉貴の悲鳴で完璧に俺は覚醒した。

「どうした!」

悲鳴は風呂場の方から聞こえた。不安な気持ちですぐに駆けつける。

姉貴は風呂の戸の前に座り込んでいた。

「姉貴！」

「！」

俺の呼びかけに驚く。

近づくとしたら、姉貴が飛びついてきた。

「だめえ！来ちゃだめえ」

何があつたつて言うんだよ、朝っぱらから。この様子だと風呂に化け物でもいるのか？

「姉貴、落ち着けてばよ。そうしないと……………」

その大きな…………胸が…………

「あーもう、邪魔だ！」

ドーンと姉貴をフットバス。

「やゝれ」

風呂場を覗き込んだ俺の目が見た物は

湯船に浸かる。

一糸まとわぬ。

目を閉じている。

柚葉だった。

???

.

始皇帝死 嗜好底止 思考停止。

えと、どーいうこと？

「柚葉さん」

返事がない。まるで屍のようだ……

そんなことあったまるか！

脈を確認し………ていいのか。

――推理中――

仮定：

柚葉は風呂に入った。

何で返事しねーんだ！？

仮定：

柚葉は風呂風呂に入った。

が、あまりにも眠すぎたため
二度寝した。

――推理終了――

そかそか、二度寝ならしょうがない。

俺も二度寝してくるか。

.

「こんな光景弟には刺激強すぎだよ」

頭をさすっている姉貴。ゴメン。心の中ならいえるよ。

えと、まあ、確かに色々問題ありそうだな。

「いもうとは・・・死んじゃった」

姉貴い！そんな縁起でもないこと言っなア！

「死んだふりかな」

姉貴い！そんな演技っばいこと言っなア？

あーもう。解決するにはこれしかねえ。

湯船から柚葉を王子様だっこの要領で持ち上げる。

「うわっ。なんだこれ。湯がつめてえ」

柚葉の身体も氷のようにヒンヤリしていた。

「だいじょぶか！？柚葉」

脈はかるうじてあった。

ゆりゆり。フリフリ。ぶんぶん。

・・・起きない・・・

柚葉の頭に自分の手を当てようと・・・思ってたけど手がふさが

「む……無念」

目の前が真っ暗になった。

.

気がついたら天井を見上げていた。

「うつ、まだ痛え」

「あつ、起きたんだ」

「うん、あのさ柚葉はどーしてる」

「いもうとは部屋でいじけてる」

「俺のせいで……」

「……」

「……」

「それは違うよ」

「え……」

「今いもうとがいじけてるのは弟のことを袋叩きにしちゃったからだよ」

「それは……」

「いもうとさ、昨日からずっとお風呂で寝ちゃってたんだよ。そのせいで極寒の地でゾンビに襲われる夢をみたんだって。そこでは弟がいもうとを守ってたらしい。で、弟が噛まれて倒れてゾンビ化したと思ったんだって」

ははは。ゾンビ化しないように気をつけよう。

.

「弟。だからいもうとのことは許してあげて」

「え、あ、うん。許す許す。それよりその……裸見ちゃったことは……」

「あーそれなら」

ゴクン

「全然気にしてない っ て」

ああ。柚葉の心は広いんだな。

「それよりか、見たかったのなら何で言ってくれなかったの っ て」

「あれ！いつの間に俺が変態設定に！？」

「覗きたいのも分からないことはないけど、ノックぐらいしてよ」

つて

「いつの間に俺が覗いたことに!？」

「あと、私の身体だけ見るなんてずるいよお兄ちゃん　って」

「えー！？それはどういう事。俺に何をしろと！」

「裸の女の子抱き上げるなんてかっくいーだいたんー」

「いいのか。それは女子的に見て好感度UPのアクションなのか」

「夢でもあんな事したもんね」ニタツ

「何したんだ——！夢の中の俺、何したんだ——！！」

「大好き、お兄ちゃん」

「ええええええええええ」

「私以外に彼女なんか……いないよね」ギラッ

「ひいイツ」

「お兄ーちゃん！」

がくがくブルブル。

「なーんていつてたりして」

「へっ???」

「フフフ」

なんだか、姉貴に恐怖を感じた一瞬だった。

「冗談だったの？」

「さあ銅でしょう？真の嘘つきは嘘を真実に織り交ぜる物なんだよ」
ニコッ

「なにそれ怖い」

今日はお姉ちゃんのあたしがいもつとについてしょうかいするぞ。
ニコッ

身長：157cm

体重：？

血液型：B型

FAVORITE

・鬼

・胃

・ちゃんこうどん

DISLIKE

・尾根

・医

・ちゃんこそば

はあ、何で弟になついて あたしには

ま
いつか。

痛そう

ガチャッ

あ、お兄ちゃんが帰ってきた。

私はいつものようにお兄ちゃんをお出迎え。

「おかえり、！？どうしたの、それ？」

私が見たものは変わり果てた兄の姿だった。たとえば右手がブルブル振るえている。

「ゆ ゆずはー、いたいよー」

声もか細く振るえていた。

「待ってて、お兄ちゃん！」ダダダッ

（ありがとう。ゆずは）

「おねーちゃんー！お兄ちゃんが瀕死の受胎したー！ー！」

（おういー！焦りすぎだろ！どういう意味だ！）

ガタンッ

「キャッ！」

「あわわっ！」

ガチャン　ゴチャン　ドタン　バタンキュー

（あせりすぎだー）

ドタ　ドタ　ドタ

「お兄ちゃん！」

「ありがと柚葉。姉貴呼んでくれたのか」

「来て！お姉ちゃんがお兄ちゃんの瀕死の重体に驚いて、滑って転んで、タンズに頭ぶつけて、あまりの痛さにとびまわってる時にタンズの角に小指ぶつけてぶっ倒れちゃったところに、タンズが倒れ込んで気絶しそうになった所に、

驚いた私がお姉ちゃんの頭につまづいて踏んじやって、そのうえ顔面にしりもちついちゃってその勢いで・・・しちゃってお姉ちゃん気絶しちゃった。

助けて、お兄ちゃん！」

と

色々突っ込みする前に柚葉が俺の、

自転車に乗ってるときにコオロギが服についてるのをみて振り落とした後もお、『まだついてるんじゃないか』『もつといるんじゃないか』との強迫観念に襲われた俺の足は全力でペダルを踏み、俺の手は暴れてハンドル制御を失い、その両者の超加速と自転車が左に倒れというか吹っ飛んでいったことで前方にとばされた俺の脊髄が反射で受け身をし、服の上からなお肩、腰、脚を削り、地につい

た衝撃で骨がやられた

右腕をああああああああああああ

「ごめんね、お兄ちゃん」

「いたいよう」

「私がお兄ちゃんの右手の代わりになるから許して」

「えええつ！」

「ねっ
ウルウル」

ド
キ
ド
キ

「あの……」

「まずは、お兄ちゃんの妄想をぶち壊す」

「してない、してないから――――！！！！」

晉

「はい、あーん」

「あーむ。もぐもぐ」

「美味しい?」

「まあ袋とじぐらいは美味しいかな」

「よくわかんないけど嬉しい」

「それより姉貴ほつといていいのか」

「いいよ、自業自得だし。はいあーん」

「あむ。むしゃむしゃ」

どこにも姉貴に非がないように思えるのは気のせいかな?

私がお兄ちゃんについて語らせてもらいます。

身長：175cm

体重：64kg

FAVORITE

・私 (だと思う)

DISLIKE

・お姉ちゃん (だといいな)

お兄ちゃんは平和がすきです。

ケンカは嫌いです。

虫はもつと嫌いです。

でも やるときはやってくれそう。

否 やってくれると信じています。

そんな時がくるか不明ですが。

夏休みのクラスメイト

「ちょっと出かけてくるね」

柚葉が出かけるみたいだった。

別に行き先は聞いたりしない方がいいだろう。なんかウザいだろうし。

でもなあ迷子とまではいなくても、誘拐とかこわいかも。うーん。

「柚葉！」

「何、お兄ちゃん」

「どこ行くんだ」

「友達と遊びに行くんだよ。もしかしなくても連れて来るかも」

「そうか。気をつけるよ」

「うん！行ってきます！」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

あ どこ行くか聞き忘れた。

「あらっ？いもうと出かけちゃった？」

「ああ。なんか用あったのかってうおい！」

「どうしたの」

「なんだその格好！？」

それは、血のにじんだ包帯ぐるぐるまきの、ブラッドマミーみたいな姉貴だった。

「姉貴！」

昨日の怪我そんなひどかったの！？

俺の右手もうずき出す。罪悪感。柚葉の代わりに、ごめんなさいします。

「なんか買ってくるし、欲しいモノある？」

「それじゃあ、クーリッシュとガリガリ君とモナカとピノと麦茶お願い」

なんか多い気がするが。

「わかった」

靴を履いて玄関の鏡で身だしなみを整える。もち、これ礼儀。

そしてドアを開いたときに「ねーねー、受胎ってなんのことー」と聞こえた気がしたが

ボタン

気のせいだろう。

左手でチャリを操り、新鮮な空気の中
つまらない一人あくびをしていた。

道のり半分の所で知り合いに声をかけられた。
が、無視して行こうとする。

「おいおいちょっと待てよお」

「なんだ。つか話しかけんな」

「いつもきついなあ。親友が話しかけてんだぞ」

「特に悪いと思わないが言わせてもらう、俺はお前を親友と思ったことは無い」

「おい、さすがのおれでも傷つくぞ」

「ふん」

「お互いあだ名で呼び合う仲間じゃなかさー」「ふーちゃん」

「その名で呼ぶとは。いくら何でも許さんぞ、『モクズ』」

お互い『ふーちゃん』『モクズ』と呼び合うぐらいには仲がいいのかもしれない。

.

『ふーちゃん』

それは俺が

- 前略 -

して

- 中略 -

が起きたことによって

- 後略 -

されたという忌々しい記憶に由来する。

『モクズ』

それはコイツの名前が

海野 水雲（うみの もずく）

である事に由来する。

そいつとの付き合いは小学生の時に始まった。

あれは夕日が綺麗な日のことだった。

まあ、めんどいから 中略。

「今日からお前はふーちゃんだ」

「・・・・・・・・」

その時俺は泣いていた。

「さあ、見送ってやれ。あいつは星になったんだ。今も空からお前を見下ろしてるよ」

「ありがとうモクス」

「モクスじゃないもずく - 後略 -」

まあこの日涙を見せた。一生の不覚だ。

こんなこともあった。

- 中略 -

あんまり楽しくなかった。

.

「ふーちゃん。あのちょっといいですか？」

「発言は却下する」

「ひどっ！」

「仕方なさすぎなので、独り言は許可する」

「ぶちひどっ！だが許可されたことだし言わせてもらっぞ。中略後略が多い！」

「モクズとの思い出だからな（笑）」

「笑ってすますな」

モクズとの思い出は俺にとって少しツライものだったということも関係してるけど。

その時ちっちゃな女の子が、俺達の隣にたった。

「何してるですー。2人ともー」

またまた新キャラ登場。その名も『くじら』ちゃん。一応同級生。ちっちゃいけど。

『くじら』と言っても改造したり、不幸願望があったり、ノーブラだったりはない。

あ、その、ノーブラじゃないって見たわけじゃないかな！

「くじらちゃん！聞いてくれよ」

「モクズがどれだけこの話にいらないか説明してたんだ。世間一般よくあることだろ」

「あーあるあるー」

「ねーよ！そんなピンポイントなあるある、ねーよ！」

「春の原ぐらい面白い事出来るならいてもいいかな、どうだろうってかんじだな」

「出来ても迷うんだ！」

「中目黒先輩のポジションがあいてるよー」

「それは俺が断固拒否する」

「じゃあ、いらないー」

「そんな結論いやーーーーー」

「じゃあ、ふーちゃんとエキサイティングな夜をー」

ウィーン

「うー、シクシク……おれなんて、おれなんてあー。いじめてしまった。」

「可哀想な事しちゃったねー」

「くじらおまえも随分かわいそうなやつだよ」

「えっへんー」

「ほめてねーよ」

ピッピッピッピッ

「ねーねー今からゲーセンに行かない？」

「おっ、くじらちゃんナイス提案」

（注 モクズの回復の早さはみんな既知のためスルーされています）

「俺パス。姉貴のパシリ中なんだ」

ウィーン

「そうなんだー。それは残念ですー」

「でも、いやそうには見えないんだよな」

「あー。分かる、分かるー。どっちかって言うと嬉しそう」

「勝手に言ってる。俺帰るからな」

「うんー。またねー」

「しゃーねえ。くじらちゃん、おれたち2人でゲーセンいきますか」

「1人で逝っておいでよー。たのしーよー」

モクスがいじけるのも本日二度目である。

モクスとくじらを見送って帰路につく。

「ジー」

「・・・・・・・・」

「ジージージー」

「・・・・・・・・」

「ベイベ、ベイベ」

「・・・・・・・・」

「ジージイーがーベイベ、ベイベ」

「あの。何でついてくるんだ？くじら」

「さー。なんででしょー」

なんなんだ？

「ふーちゃんー。どこ向かってるのー？」

「家だよ、家」

「パシリはー？」

「もう買うもんは買ったよ」

「ええー！いつのまにー！」

「おい、おまえ見てたろ。コンビニでアイス買ったとこ」

「自分用かと思ってたー」

「腹こわすわ」

「今からさー。ふーちゃん家言っていー？」

「何だよ？アイスならやらんぞ」

「ちよつとぐらいいーじゃんさー。けちんぼー。ひとでなしー。食いしんぼー」

「や、だからコレは姉貴ので……………」

「姉コンー」

「俺を侮辱する気が」

「本当はね久しぶりに美人さんを見たいのー」

ドキッ

「まさかまだ……………」

「うんー、晴美さんだーいすきー」

「やめてくれよ。まだ言ってるのか？」

「うんー。だってだってー、もう魅惑の感化の虜だよー」

「今モーレツに怪我中なんだ」

「お見舞いに行かねばー」

墓穴ほった……………

「やめてくれ、結婚だけはやめてくれ」

「あらあらー、盗られたくないのーなら守ってみせなよー」

あーもう、そーゆーことじゃないけど・・・

それから、もやもやしたまま歩き続けるのであった。

クラスメイトを紹介する。

『モズク』

身長：172cm

FAVORITE

・うーんと、よくしらね。

DISLIKE

・ピーマン

・怖い人

・かつこいい人

・金持ち

・当選者と名の付くもの

・席替えて「公家ゆかな」の周辺の席になったやつら
・母ちゃん

くじら、うちに侵入す

「ただいま」

「おじゃましますー」

「あら、おかえり」ニコッ

「・・・・・・・・」キュン

ときめく擬音は俺のものじゃない。

「あれ？姉貴。その格好・・・・・・・・」

「え、何？ヘン？」

「いや、その普通だけど」

その普通さが・・・・・・・・

「可愛くて見とれちゃった？ふふっ」キラキラ

「ダメー。ハルミンは渡さないよー」

晴美はおまえのものじゃないよー

じゃなくて！

「なんで普通の格好！？包帯はどうした！包帯は」

「あー、アレ？アレはマミーのコスだよ」

「なんだとお！」

「これで合法的に遊べるー」

「そうだね。くじらちゃんと遊ぶの久しぶりだね」

「ねー」

「一つ聞いていいか、くじら」

「なにー？」

「姉貴のどこが、その、好きなんだ？」

「そりゃー。やっぱりー。ビボウー？」

「きくなよ」

「世界で二番目に美しいんだよー」

「まあ、うれし」ポッ

「ちなみに一番は誰だ？」

「女神ー」

「神は世界の内の存在かよ」

「じゃあクレパがいちばんー」

「クレパ？なんだそれ」

「クレオパトラのことでしょ、くじらちゃん」

「そうそうー」

「なるほどクレオパトラか。て、分かるかああああ！なに姉貴即答してんの。てか、くじらはクレオパトラ見たことあんのかよ！」

「無いけど絶対いちばんなのー」

「どこからくるんだ。その自信は」

「じゃあ、わたしー」

「さっきの絶対はどこいった！」

「それなら、ふーちゃんはどっ思うのー？誰がいちばんー？」

「お、俺か！？俺は……………」

「ハッキリしなさいよ弟！」

「えーとえーと。俺がいちばんだ!」

「「「・・・・・・・・」」」

「何言ってるの?」

「そうだねー。えへへー」

やめてくれ! 姉貴、そんな目で見ないでー! くじらも苦笑いなんて
・・・・・・・・

「こんなことしてる場合じゃ無いよー。早く遊びたいよー」

「ならいいモノがあるよ。ゲームなんだけどさ」

そついつて姉貴は自分の部屋に走っていった。

「なんだろなー、なんだろなー」

姉貴はすぐに戻ってきた。

「じゃじゃーん。『君らは問題児』」

「なんだそのタイトル」

喧嘩売ってんのか?

「面白そー」

そ、そうか？

「これは問題児を更生、育成するゲームなの」

「やりこみゲームだ」

「略してキミモンてよばれてるんだよ」

「その響きは……」

「いーから、いーから。ささ、くじらちゃんやってみそ」

「はいですー」

《こんにちは！》

《きみらはもんだいじのせかいへようこそ》

《わたしのなまえはドキーオ》

《みんなからはプロのちょうきょうしとしてたわれているよ》

《このくには……きみらはもんだいじ、すなわちキミモンがた
くさんせいそくしている》

《そのキミモンといういきものをプレイヤーはペットにしたりしよ
うぶにつかったり》

《そしてわたしはこのキミモンのけんきゅうをしているわけだ》

《でははじめにきみのことをおしえてもらおうか》

「ぱくりだろ！これ！」

「気にしない、気にしない」

「ひと休みー、ひと休みー」

くじらはルンルンで操作する。

【くじら】ピッピッピッ

「それに、平仮名ばかりで読みづらい！」

「漢字設定もあるよ」

「頼むよ姉貴」

《きみは男の娘かな女の娘かな それとも秀吉？？》

「なんだコレ！漢字おかしいだろ！それに秀吉って……………」

【秀吉】ピッ

「くじらの性別は秀吉かつ？」

「おもしろそうじゃん」

「じゃんー」

「まあゲームだしな。仕方がないか」

「どーせ、キャラメイクは常に女の子だろう。弟よ」

「なぜ知っている。白眼か」

「監視カメラだ。ひっひっひ」

「なんか怖い。いやすごく怖い。」

「え冗談だよな。だよな、そんなことするはずないよな。そんな損なことするメリットなんて……」

「さあ、銅でしょう」ギラッ

姉貴の笑顔が歪む。

「ひい！」

「あれはさ、姉貴。仕方がなかったんだコッソリノートに名前を書

くカモフラージュで……」アタフタ

「あれって何のことかな、かな。カメラなんて冗談だったんだけど」

「……………」

ああああああああああああ

「やったー。きみもんもらえたー。ハッピー」

「それはハッピーね。くじらちゃん」

俺はアンハッピーだよ。

「「怖い高校生」だってー」

「くじらちゃん。名前つけてあげなよ」

「じゃあー『ふーちゃん』にケッテー」

「おいこら、くじら！誰が怖い高校生だって」

「おもしろそうじゃん」

「じゃんー」

「まあ俺だしな。仕方ない……………わけないわ！」

「どーせサイレントヒルもひとりじゃ出来ないんだろう。弟よ」

「なぜ知っている！？ていうか怖いってそっちか！」

「あー！いきなりバトルだー！」

《ライバルが勝負をしかけてきた》

《「いけっ！」「ニート探偵」「》

「お持ち帰りいーしたくなるほどかいー」

「いけっ！ふーちゃん！自分は自分で操作するんだ弟」

「俺か、分かったよ。えっと………」

なんだコレ。

「はやくうー」

どうすればいいんだ

「2択でしょ？さっさとしなよ」

仕方ない。

《ふーちゃんの「したでなめる」攻撃》

「弟サイテー」ギラッ

「サイテー」キャハッ

くじらの無邪気さとは対照的に姉貴が怖い声を出してる。

《硬化抜群だ!》

「なにっ!」

「固まった……の?」

「何国人がつくつたんだろー」

そんなこんなで一日中遊んでいた俺たちに、時間が迫っていた。

「もう帰らなキャー」

「そのクソゲー貸してあげるよ」

「えーいいんですかー。でもー、それよりもハルミンがほーしいー。結婚しよー」

「うーん、ならくじらちゃんが16歳になって、まだあたしのこと好きだったら結婚しよー!」

「はいー!」

「おいおいおい！16って今年だろ！」

■

くじらについて、

身長は俺の半分ぐらいという印象

（そんなわけ無いけど）。

とにかく（俺の）姉貴を好きすぎて困る。ほんと困る。礼儀がなっていない。

あんな姉貴なんかより16倍俺のほうが・・・

イヤなんでもない、なんでもない。

16で姉貴と結婚とか笑えないよな。

あいつ9月1日誕生日だから夏休み終わればすぐじゃん。

有り得ないよ。くじらと兄弟とか。京大のほうがまだましだ。

・・・

いやごめんなさい。京大なんて俺には無理だ。

え、なんでくじらの誕生日知っているかって。

え、え、ふ、普通だし。ほかのやつのも知ってるし。

えと、えと、クラスの女子全員の誕生日知ってるし。

・・・・・・・・・・

べ、べつに美少女ハーレムなんて作るつもりなんてないんだからね！

くじら、うちに侵入す（後書き）

すみません。嘘です。

みんなの誕生日なんてしりません。

くじらのだけ知ってます。

ごめんなさい。

あ、モクズのも知りません。

悪夢のデート計画

夕方、柚葉が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり」

「ごめんねお兄ちゃん。遊んでたら遅くなりすぎて友達連れてこれなかった」

ああそういえばそんなこと言ってたな。

「ところでどんな友達なんだ？」

「えとね、とーても可愛い子で、お兄ちゃんの事好きだつて」

「へーそんなに可愛いのか。でしかもお兄さん想いか」

「うん！ お兄ちゃんはお兄ちゃんでも、私のお兄ちゃんを好きなの」

「へーそうか。お前のお兄ちゃんを好きか……て、お前の兄は俺じゃねーか！」

「安心して、お兄ちゃんは誰にも渡さないんだから！」

なにいつてるんだ、コイツ。

「ひとつ言つとく。俺はお前のもんでもない」

「お姉ちゃんの物だったの!？」

「いやいや、まず誰のものでもない」

「みんなの物？」

「物じゃない」

「あたしの玩具よ」

「お姉ちゃん!？」

「いきなり登場すんなよ。そして言ってること意味不明だし」

「で何の話してたの？」

「えとね、確か柚葉の友達が・・・俺の事好き？　は？　冷静に考えてみればなんだそれ。会ったこともないだろ！」

「お兄ちゃん格好いいって、好きだった」

「へ？　会ったことあるの」

「コレ見て」

「あー妹の携帯の待ち受け、弟になってる」

「何やってんだよ！」

「コレ見せたら『魅せられた、ウチこの人に一生ついてく！！』だつて」

「一目惚れってやつね」

「うん、クラスの男子全員に告白しちゃうくらい惚れやすいの」

「そんな事したんなら何人かからOKもらえなかったの？」

「入学式の日、全員同時に告白しちゃったから、男子たちは取り合い・闘い合い・話し合い、その結果だれも手を出さないことを誓い合ったんだつて。それで『誰もかまってくれんぜよ』というわけ」

「同情できんな、というかなぜ見せたんだ、柚葉。理由を聞かせてもらおうか」

「それは、えーと、だよっ」エヘッ

「なんも説明してないぞ」

「ホントはね、彼氏の話になって、『くうちー』も『かふえピョン』も彼氏いるいるで、私も空気読んでいるよっていったら、だれだれつてなつて、魅せちゃった。あはは」

「あはは、じゃねーよ。なんだよなんなんだよなんで……」

「だから今度その子連れてきた時は彼氏になつてね」

「いやだよなんで俺が」

「そうしないと、そのヒトメボレンは弟に一生コホンコホンだぞ」

「なんだよヒトメボレンで。新手的ポケモンかよ」

「チツチツチ。それはちがうぞ。文字オーバー」(俳句風)

「もう、お姉ちゃんは話しそらさないで!」

「すみません」

「それでお兄ちゃんは彼氏になるとして……」

「待てまてまてーい! 彼氏になる必要はないだろ」

「てかなれるのか？」

「なんで? 理由を10文字で述べて」

「フリでよくないのか？」

「ちなみに、句読点・符合は文字数に数えません」

くそがつ。くそ姉ならぬ糞妹だな。

「フリでよくないのかな」

それでも従う俺（涙）

「『かな』が一組足りないので不合格」

「嘘だ！！」

理不尽だ！ あんまりだ！！

「お兄ちゃん」

「はい」

「敵をだますなんて不可能だから本当に付き合って嘘じゃなくしてしまえばいいの」

「むちゃくちゃだな」

「じゃ、明日に実行・・・と」

「1日だけだぞ」

「なら明後日はあたしの番ね」

「便乗すんなよ」

「それで明日どこ行きたい？ お兄ちゃん」

「ん？ 家じゃないのか？」

「だってー。家でラブラブを見せつける方法なんて限られてるし。それでもいいんならあ」

「なにをするつもりだ」

「やっぱり、デートは遊園地かな？」

「でもな、外で知り合いにでも会ったら困るだろ」

「なんだあ、そんな事なら大丈夫！ 私気にしないから」

「いや俺は困るんだよ。」

「ポチポチっ ♪ ポチっと」

「ん、どうした？」

「明日の予定を送信っと」

「はあ、大変な1日になりそうだ」

「明後日も入れて2日間だぞ」

「んなばかなあ」

遊園地に

今日は柚葉と遊園地にやってきた。

と、言いたいところだったが、待ち合わせの銅像の前でひとり寂しく待たされる俺。

「デートは待ち合わせからだよ」という柚葉の礼儀らしい。

「それにしても遅いなあ」

30分待たせるなんてありえんだろ。

もう帰るか。そう考え始めたところにやってくる。

「だーれだ？」

「誰だろう。姉貴か？」

ズサッ

「うわっ目があっ目があっ！」

「お兄ちゃんのいじわる」

「ううー」

「お兄ちゃん、まった？」

「うう、もしかしくてもずいぶん待たされた」

「却下。やり直し」

「はあ!？」

「そこは『僕も今きたところだよ キラキラ』ていつとこでしょ」

「わかったよ。ゴクン 僕も今きたところだよ キラキラ」

「よし! じゃいこっか」

「ジャイ子？」

「ねえ。先ずどこ行きたい？」

「ちよつと待て」

「いや」

キツパリ即答。

「え、俺30分も待つ」

「知らない」

話聞け。

「友達来るんじゃないかったのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あ、ゴメン紹介忘れてたね。こっちがいつも仲良くしてもらってるトモちゃん」

そう言っただけでもない空間をさす柚葉。

「エア友達・・・・・・・・か。なら昨日の話は・・・・・・・・？」

「なだつたことに」

「ならねえよ！」

「何でそんなことを・・・・・・・・」

「だって、お兄ちゃんと一緒に来てみたかったんだもん」

「はあ」

「それとも帰るの？ 私と一緒に楽しくない」

「いや、そうじゃないって。・・・・・・・・ほら、もうそんなことど

「うでもいいから行くぞ」

「……………うん」

「お兄ちゃん」

そう言っつて柚葉が腕を組んできた。

「どうした？」

「やっぱりデートは腕組むものだと思っつて」

「デートっつて兄妹なんだから違っくんじゃないか」

「彼氏役するっつてきめたし」

「見せつける相手いないんならいーだろ」

「昨日のことなかったことにならないんじゃなかったっけ？」

「うっ……………」

「そ、それで柚葉はどこ行きたいんだ？」

「お化け屋敷！」

「いきなりか」

「……お化け怖くてよる一人じゃ寝れなくなっちゃう。仕方ないからお兄ちゃん……」

「なんかいったか？」

「何でもないよ！」

「？」

「さ、い……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1841x/>

姉が美人で大変だ

2011年11月23日19時49分発行